

元禄期

軽口本集

近世笑話集(上)

武藤禎夫校注



江戸時代は17世紀の後半にいたって笑話集がさかんに刊行されるが、その背景には笑話を愛好

する町人階層の活発な創作活動、プロの話芸者による口演興業の盛行があった。本書はこの時期に成った笑話集のうちから笑いの純度の高い作品として『当世手打笑』『当世はなしの本』『軽口御前男』など5種を選び詳注を付したものである。



黄 251-1
岩波文庫

かる くち ほんしゅう
元禄期 軽口本集

1987年7月16日 第1刷発行 ©

1992年7月6日 第6刷発行

校注者 武 藤 禎 夫

発行者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店

電話 03-3265-4111(案内)

定価はカバーに表示してあります

印刷・精興社
製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-302511-3

岩 波 文 庫

30-251-1

元 禄 期

軽 口 本 集

——近世笑話集(上)——

武藤禎夫校注



岩 波 書 店

凡 例

二百六十年に及ぶ江戸時代を通して、短い笑い話を集めた噺本はなしほんは一千余種も出版されている。本巻では、近世初期における笑話の集大成『醒睡笑』(岩波文庫所収)に代表される「咄の類」につづく時代で、文化に参加する階層が広がり、各種の庶民的文芸が盛んになった元禄期前後の「軽口本」かるくちほんの中から、素人同好者による創作笑話選集と、職業話芸者の口演笑話集を五種所収した。すでに生活に身近な内容と洗練されたサゲを持った親しめる笑いで、現代でも十分鑑賞し共感できるものが多い。

まず、各書の中扉裏に、使用した底本の書誌を主とした解題を簡単に記した。

本文の翻字にあたっては、元来の趣旨が噺本の特質であるおもしろさを紹介することにあるので、通読の便を考えて次のような方針をとった。(厳正な校訂による翻刻や複製本については解題中に示しておいたので、必要な際には参看されたい。)

1 底本の漢字は、原則として常用漢字や通行の字体を用いた。また、異体字(例、𠂔→靈)や記号化した文字(→也)、極端な宛て字(為中→田舎)なども通行のものに改めた。

2 副詞・助動詞・動詞・接統詞語尾の類にあてた特殊な漢字(置け共↓置けども、無筆成人↓無筆なる人)などは仮名書きに直し、仮名書きでは分かりにくい個所は適宜漢字に改めた。

3 仮名は原則として原本の用字・表記に従い、旧仮名遣いに統一しなかった。また、当時平仮名の意識で使われた「ハ」「ミ」「ニ」の片仮名や特殊な連字(お↓より、被成↓なされ)などは、通行の平仮名に改めた。

4 原本の送り仮名は不統一な上、省略が見られるが、多く活用部分から付け加えた。ただ読みが確定できぬ場合(聞ば↓聞かばカ、聞けばカ)は、そのままにしたこともある。

5 振り仮名は、すべて新仮名遣いとした。原本にはあっても判読容易なものや重複する場合(合は削り、逆に漢字に改めた際に新たに付したものもある)。

6 反復記号は、原本の「ゝ」「と」は用いず、同字を重ねるか、「々」「く」「ぐ」などとした。(たゞ↓ただ、各と↓各々、中く↓中々、これく↓これく、さまぐ↓さまぐ)

7 清濁・句読点は、私意によって付した。

8 会話部分には括弧「」を付した。また、心内語の場合に付したものもある。

9 拗音・促音は使わず、片仮名は原則として感動詞などの場合(ハア、ヤレ)のみ残し、小

文字は評語や連字の中に付した場合（二チ夜、一ト息）で残したものもある。

10 明らかな誤りや衍字^{えんじ}は、本文中で正して注記しなかった。

11 本文中、脚注を施した語句の下に、注番号を付した。また、特に他書や他文芸との関連を記したい場合は、文末に＊印を付した。

挿絵は、原本の全図を収め、該当話の近くに挿入した。

脚注は、本文中の語句や人名・地名、および際物咄の背景にある事象、サゲの理解に役立つものなどについて簡単な説明を付けた。この場合、引用文以外は新仮名遣いとした。

補注は、笑話に多く見られた同想話のうち、筋やサゲの部分で興味ぶかい異同のある話に限り、五十話ほど参考に掲げた。脚注を補う記述や典拠の資料などにはあえて触れなかった。

解説は、近世初期から元禄期にいたる笑話の変遷と、この時代の噺本の特色を記した。

底本を利用させていただいた東京都立中央図書館加賀文庫・東京大学文学部国文研究室・同国語研究室各位の御好意と、同僚矢野公和氏の御教示に、厚く御礼申しあげます。

目 次

凡 例

当世手打笑 九

当世はなしの本 九

かの子ばなし 一三

軽口御前男 一八三

露休置土産 二六一

補 注 三四五

解 説 三六九

当^{とう}
世^{せい}
手^て
打^{うち}
笑^{わらい}

（延宝九年刊）

解題 底本は東京都立中央図書館加賀文庫蔵本。半紙本五卷合一冊。替表紙で題簽を欠き、後人筆で「当世手打わらひ 全」と墨書。目録題・内題・尾題とも「当世手打笑」。柱刻「笑一（一五）丁付」。本文は半面八行、一行約一八字詰で句点がつく。序一丁半、目録二丁（各巻）。本文丁数六九（一一・一四・一六・一五・一三）。話数八五（一三・一八・二〇・二一・一三）。挿絵数半面図二一（五・四・四・四・四）。巻五本文末に「延宝九年正月吉日 敦賀屋弥兵衛」の刊記が付く。底本は巻頭の半丁（序は一丁裏から始まり、一丁表は後補の白紙のまま）と巻三の十七丁（目録から推定して、十七丁は最終話の後半部分）の一丁が落丁である。こうした不備も、他に本書の所在を知らぬため、補えぬままにした。

延宝七年の『にがわらひ』にはじまり、同八年の『軽口大わらひ』『けらわらひ』、同九年の『軽口口まね笑』と、本書同様「わらひ」を書名に冠した軽口本が続刊された。いずれも、俳諧の連衆にも似た笑話同好者が、町の「咄の会所」に集まって、競って「語り遊びし軽口を書集めて」出来た笑話本である。従来の古今の笑談を主とした生硬な「咄の類」に比べると、格段に身近な話題と洗練されたサゲを持つ純度の高い笑いとなっている。日頃見聞したり新たに考えついた笑話を披露した同好者による創作活動は、話芸者の口演笑話と関連し合い、純粹な笑話の確立に役立った。この種の代表作品として取上げてみた。

なお、本書の改題細工本に『軽口居合刀』（元禄十七）がある。版本の所在は不明で、国立国会図書館蔵の写本によると、序文を新刻し、巻一は本書の巻二で一四話まで、巻二は本書の巻一で一二話まで、巻三以下は、一二話、一二話、一〇話までの計六〇話所収の縮小本である。本文も書写の際に生ずる異同以上に語句の改変が見られる。（巻三第二話の補注参照）

本書の翻刻は『嘶本大系』第五卷（東京堂出版・昭50）にあり、改題縮小本『軽口居合刀』は『近世文芸叢書』第六「笑話」（国書刊行会・明44）などで見られる。

序

なげぶしの唱歌^{しやうが二}つけるすべしらず、諸分^{しよわけ三}の座敷にのぞく事もなくて、
 寵土^{かまど}関白^{かんぱく四}にてうち暮らすならひならば、いつの世にかは大臣^{だいじん五}とは仰が
 れん。いでや、おのこと生まれては騒^{さわめ七}くこそ為^{おも}以^もなれと、土の車の我
 等^{わらわ}しきまで、ゆるりくはんと^{一〇}して暮らす忝^{かたじけな}さを観^{かん}じゐたる折^せから、は
 したなき槓^{まさき}の板戸^{おと}を音^{おと}づれて来る。みれば、あたりの通^{とお}り者^{しや}等^らが、い
 ざのめよと、夕部^{ゆうべ}の月花^{げつが}に向^{むか}ひて打寄^{うちよ}り、語^{かた}り遊^{あそ}びし軽口^{けいこう三}を書集^{しやくしふ}めて、
 五卷^{ごくわん}となしてみする。もとより僕^{やつがれ}も好士^{すきもの二}にて、さらばとてこれをひら
 けば、どうもいへぬおかしさにて、こらへ袋^{ふくろ四}のをのづから、座敷^{ざしき}もど
 よみて、大わらひになりぬ。さて、此の書^{しよ}に初冠^{うしかぶり一五}させて、当世手打笑^{とうせいてうちわらい}
 といふ事^{こと}しかなり。

一 投げ節。近世前期に流行した小歌の一種。

二 楽器に合せて歌い、旋律をくちざむこと。

三 堂に入った遊び方。

四 家の中だけで威張る人。亭主関白。

五 大尽。豪遊する遊客。

六 『徒然草』第一段の文句をなぞる。

七 遊里をひやかし歩く。

八 心に思う所。考え。

九 野暮で田舎者同然の我々風情までとの卑詞か。

一〇 緩り寛。ゆったり落着いた様。原本「り」脱。

二 粹な人。通人。

三 滑稽な洒落や笑い話。

三 趣味に凝っている人。

四 堪忍袋。

五 元服。書名を付ける。

当世手打笑第一目錄

- 一 祇園町ぎおんまちにて羽織うゑを拾ふ事
- 二 与作よさくといふ者つかいを使つかにやる事
- 三 田舎者きんちやく巾着きんちやく切らるる事
- 四 在郷ざいこうに入いり智ちを取りたる事
- 五 無筆むひつなる者かねうけとり銀請取ぎんけいとりに行く事
- 六 うつけ者かも賀茂けいばの競馬けいばに餅もちを売うる事
- 七 紺屋こうやへ使つかに行く事
- 八 秀句しゅうくのまねまねをする事
- 九 誓願寺せいがんじの図子ずしにて手ての筋見すじみる事
- 十 べらばうべらばうを知らぬ事
- 十一 めつためつたとことこばす者ばすものの事
- 十二 脚半きやはんをかたし履はく事

十三 人の男むすこを女おなごじやとあらそふ事

当世手打笑第一

一 祇園町^{ぎおんまち}にて羽織を拾ふ事

ある者、夕べ^{ゆう}花見の帰りが落したるちりめんの黒羽織を、祇園町にて拾いたると悦^{よろこ}びけり。とつとぬけ男^{二 ふたり}二人、これを聞きて、「いざ、おれらも拾いに行かふ」とて行きけり。あなたこなた見まはしけるが、一人の者、「落ちてあるぞ」とて、づか／＼と立寄り、取らんとしたれば、真黒なる犬が、わんといふて飛びかかりければ、逃げて歸りた。連れの男、「拾^{ひろ}やつたか」といへば、ぬからぬ顔^四にて、「羽織は落ちてあれど、犬めが先^{せん}をこした^五」といへば、「さては、あいつも拾いに出たよの」。

一 京都市東山区の祇園社（八坂神社）付近の地名。島原と並ぶ京の代表的な色里。

二 全く。まことに。
三 間拔けな男。抜け作。

四 平気な顔。すました顔。

五 相手に先んじて事をする。先回りする。



(卷一 第一話)